

生活知恵袋

せいかつちえぶくろ

Vol. 91

今月のテーマ 新年を展望する

♪もういくつ寝るとお正月～♪

クリスマスが過ぎて、子供たちは手ぐすねを引いて待ちわびている。「あけましておめでとうございます」「新年は目出度い」!では、何が目出度いの…!?新年だから正月だから…?こんなひねくれた事を考えているのは私だけか…?年賀状の数も年々減少し、小さい頃の記憶にある年越しや新年の迎え方は、門松やしめ飾りだけを見ても明らかに減っているように、お正月らしさが薄れて来ているような気がしてならない。

はて、お正月は誰もが待ちわびているのか?皆さんはいかがなのだろうか…。行く年と来る年、一つの境目であり区切りであるが、区切りは今日と明日、今週と来週、今月と来月、そして今年と来年、21世紀と22世紀果てしなく繰り返されていく。

では、お正月って何だ?「日本文化いろは事典」には、正月とは本来、その年の豊穰(ほうじょう)を司る歳神様(としがみさま)をお迎えする行事であり、1月の別名とある。現在は、1月1日から1月3日までを三が日、1月7日までを松の内と呼び、この期間を「正月」と言うのだそうだ。歳神様は、1年の幸福をもたらすために「正月」には各家庭に降臨するという。また、年神様は祖霊神(それいしん/先祖の霊)であり、田の神、山の神でもあるそうだ。子孫繁栄や五穀豊穰に深く関わり、人々には健康や幸福を授けるとされている。そして、その年神様を迎え入れてお祝いし、たくさん幸せを授けてもらうために、様々な正月行事や風習が生まれてきたのだそうだ。

新しい年を“迎える”と表現するのは、「1年の幸福をもたらすために各家庭に降臨する年神様を元旦に“お迎え”するからなのだ。だから“一年の計は元旦にあり”とも言われている。私自身、うん十年も生きてきて、今になってお正月のことを調べているのだから、なんと罰当たりなことか…。このような事を知ることによって、年神様に手を合わせるときの思いや、お正月の過ごし方に意味が生まれて来るのかもしれない。

人は、残されている時間が限られているときには出来て、沢山あると出来ない。どうしてもやっておかなければならない事や、今後やらなければならないことも、一つの区切りがなければならぬと時だけが過ぎて行ってしまう。“1年の計は元旦にあり”、自身のこと、家族のこと、仕事のことを改めて振り返り、明日を展望する機会にしたいものだ。



齋藤廣勝 (さいとう ひろかつ)
株式会社トータルライフサポート代表取締役
・CFP®ローティファイドファイナンシャルプランナー
・1級ファイナンシャルプランニング技能士
・日本商工会議所 年金・退職金等認定講師
・住宅ローンアドバイザー
・金融広報アドバイザー

先ずはお正月のうんちくから

今更偉そうに講釈を垂れる立場にはないが、お正月を取巻く風習が改めてなんであるかを知るためにいろいろと調べてみた。お正月らしさが薄れる中で、改めてその意味を考えてみたいし、次の世代に伝えるべきことが見えてくるかもしれない。私のように、“お正月に関する”の意味を存じない方も多しは“と勝手に解釈し、参考になればという思いで自分なりに簡略にまとめてみた。新年を改めて展望するためにも、少しはお役に立つかもしれない。年神様に失礼のないよう、罰当たりにならないようにしたい…。

【大掃除】

年神様をお迎える前に、神棚や仏壇、家屋を清めるもので、1年の間にたまったほこりを払い、隅から隅まできれいにすると、年神様がたくさんのご利益を授けてくださるそうだ。ご利益を授かるためにもみんなで清めよう。

【門松】

年神様が迷わずやって来られるようにとの案内役であり、目印として玄関前に飾るそうだ。ちなみに松は古来より神の宿る木とされているようである。ちなみに我が家では目印を置いたことはあまりない。神様は迷ってしまったら、我が家に辿り着けないかもしれないのかもしれない。

【しめ縄・しめ飾り】

しめ縄を飾る場所は年神様をお迎えする、神様をまつるのにふさわしい神聖な場所という意味があり、そこにしめ縄・しめ飾りを飾ったりするのだそうだ。その場所に張られたしめ縄は神の領域

保険と暮らしの相談センター

“生命保険でこんなお悩みはございませんか!?”

- ◆ 保険の見直しを検討している
- ◆ 加入している保険が本当に良いかわからない
- ◆ 更新時期が近く、保険料がアップしてしまう
- ◆ 将来の子供の教育費が心配

相談は無料!!
納得いくまで相談できます。

お気軽にご相談ください。

株式会社 トータルライフサポート
秋田支店

〒010-0916 秋田市泉北3丁目17-22
● 営業時間 / 9:30~19:00
● 定休日 / 水曜日

TEL 018-827-7611
FAX 018-827-7610
URL http://tls-akita.co.jp

詳細はホームページでもご覧いただけます。

と現世を隔てる結果となり、その中に不浄なものが入らないようにする役目も果たすもので、まさに聖域だ。しめ飾りはしめ縄に縁起物などの飾りをつけたものだが、代表的なのが、神様の降臨を表す「紙垂（かみしで）、清廉潔白を表す「裏白」、家系を譲って絶やさず子孫繁栄を願う「譲り葉」、代々栄えるよう願う「橙（たいたい）」などを飾り付けたものだ。しめ飾りには「みかん」がくっついているのか？もとは「橙（たいたい）でミカン科のようだが、私は見たことがないし、今ではほとんどが「みかん」なのだろう…。

【鏡餅】

年神様へのお供えものであり、依り代（よりしろ）／神霊が依り憑く（よりつく）対象物。鏡餅という名は、神様が宿るところとして神事に用いられる円形の鏡からきていて、丸餅は魂も表している。また、大小2段で太陽と月、陽と陰を表しており、円満に年を重ねるという意も込められているそう。年神様は餅が好物なのか、私も大好きだし何とかお近づきになりたいものだ。

【お年玉】

お年玉ってなんだ？決まっているじゃないか！お年玉は、子どもへの正月の小遣い。だと思いきや、じつは正月行事本来の深い意味があるようだ。広辞苑には「新年のお祝いの贈り物」とあるが、そもそも、お年玉は餅だったようで、新年の象徴である年神様の魂が宿った餅玉（よりしろ）を家長が家族に分け与えたのが始まりで、「御年魂」「御年玉」と呼ばれるようになったとのこと。玉は魂を意味し、年神様から年の初めに新年の幸福や恵みとともに、私たちに魂を分けてくださると、考えられてきた。端的に言えば毎年一年分の力を授かるということなのだ。子どもにお年玉を上げる前に、こんな講釈をしたらどんなことになるだろうか…。

【除夜の鐘】

108つあるという人間の煩惱をお祓いするために、寺院では深夜零時をまたいで108回の鐘を打ち、祓ってくれるという。しかし、最近では大晦日（1年に1回）の除夜の鐘がうるさいとの苦情から、鐘を突くのを取りやめたお寺もあるという。正月らしさを失われることが、ここ除夜の鐘にも及んでいる。祓いきれなかつた煩惱はどこに行ってしまうのか…？

また、大晦日は、年神様を寝ずに待つ日とされているようだ。私は昨年の大晦日、そうとも知らず、不覚にも神様を待たずに寝てしまった。年神様は我が家に来てくれたのだろうか…!?

まだまだお正月の風習はたくさんあるが、今年はこの位にしておこう。

世の中には風習だけでなく、決まり事、言い伝え等々、はたまた普段何気に行っていることが沢山あるようだ。人は時として、すべきことを、出来たり出来なかつたり、“守れたり守れなかつたり”する。その背景や意味を知ること、人の想いや行動に影響を与えるかもしれないし、価値観そのものをも変えてくれるかもしれない。私たちは身近にある物事に對し、もう少し“知る努力”をしなければならぬような気がしてならない。

●お年玉本来の意味と子どもの健やかな成長を願って

クリスマスにはサンタクロースからのプレゼントを貰ったばかりだろうが、子供たちにとってのサンタさんはどうやら一人ではないらしい！パパ・ママサンタをはじめ、じいじ・ばあばサンタもいれば、おじちゃん・おばちゃんサンタもいる。皆さんがこれを読むころには、かく言う私もサンタのお勤めを終えなければかりであろう。

そのクリスマスのお勤めが冷めやらぬ間に今度はお正月だ。子供たちにとっては、お正月というより、お年玉を貰える一年の中で最も書き入れ時と言えのかもしれない。最近のお年玉の相場は、我々世代がかつて貰っていた金額より、かなり上がっているようだ。年齢によっても違いがあるかもしれないが、子供によっては十万円台になる子供もいるという。かつて5・6人もの兄弟姉妹が珍しくなかつた時代にあつては、今程の金額は考えられないことだ。近年の少子化が一点集中を招いているのかもしれない。

このご時世、パパのお小遣いは伸び悩むどころか減ってさえている中であつて、全くの不景気知らずだ。手ぐすね引いて待つ子供と、正月に子供と顔を合わせる度のお年玉に怯えている。同輩も少なくない。

お年玉にケチをつけるつもりはないが、肝心なのはその後のお金の管理や使い道だ。誰もが、子供の喜ぶ顔を見たいし、将来が幸福であることを願っているが、無分別に金品をあげることは、必ずしも幸福にするとは限らない。少しエスカレートし

すぎているようにも感じるのは私だけだろうか。改めて、子供の幸福のため“の大切さ、物の与え方、お小遣いの与え方、そしてその後の使い方を考えなければならぬのでは…”

中世ヨーロッパでは（フィリップ・アリエスの著書の中で）、「子供は子供としてではなく、未熟な大人として認知されていて、ともに遊び・学び・働くという関係」であつた。つまりは、同等の人格者であり、子供としての特別な扱いはなかつたようなのである。また、フランスの思想家ルソーは、教育書『エミール』の中で、「子どもを不幸にする一番確かな方法は何か。それは、いつでもどこでも欲しいものを手に入れられるようにしてやることだ」と述べている。哲学者の言葉などを引用すると理屈っぽく感じてしまつてもいいが、何が正しいかを考えるより、子供の将来に對しての今後の関わりを考えるきっかけになればと引用させていただいた。

もらい慣れた中での生活が、その後の価値観や経済観念に影響を及ぼすことは明らかだ。であれば、特別扱いされた現代の子供の状況に、もう少し踏み込んだ関わりをしなければならぬ。お金には限りがあること、もらつたお金に色はついていないが、そのお金が生み出された背景には、人それぞれ背景があることを…。なげなしの年金の中から出ているお年玉もある筈だが、子どもはそれを知る由もない。直接的な表現ではないにしても、ある程度のこととは親が教えてあげた方がよいような気がする。それが分かれば、くださつた方への感謝の気持ちも、お金の使い道にも何らかの変化があるかもしれない。

お年玉以外でも、何かの代償として金品をあげたり、子どものご機嫌を取るための無作為な提供だけは慎みたいものだ。是非とも、お金というものに（意味）を付けたいものだ。また、使い道への関わりは年齢にもよるが、お金の大切さを、貯めることの必要性とともに教えてあげたいものだ。

●一年の計を元日にする

元旦、いや元旦ではなくても1年の初めには今年一年を展望したいものだ。いよいよ本題に入るとするが、うんちくにかまけていたら余白がなくなつてしまつたので、本題は来月号にしよう。

…一年の計にならないか…!?